黒島の古墓及び葬法調査

大 湾 ゆかり

Investigation of old tombs and funeral ceremony in Kuroshima Island

Yukari OWAN

鳩間島·新城島·黒島総合調査報告書、沖縄県立博物館・美術館 別刷 2016年3月11日

Reprinted from Survey Reports on Natural History, History and Culture of Hatomajima, Aragusukujima, Kuroshima Islands, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum March, 2016

黒島の古墓及び葬法調査

大 湾 ゆかり*

Investigation of old tombs and funeral ceremony in Kuroshima Island

Yukari OWAN*

はじめに

八重山諸島の黒島における民俗分野の調査は、3回にわたって行った。第1回は古墓の分布と葬法についての聞き取り調査、第2回は、豊年祭の爬龍船競漕と伝統芸能の見学、第3回は旧正月の綱引き行事の見学であった。

このうち、古墓の調査については、黒島研究所の協力を得て話者を紹介していただき、黒島内の遺跡や古墓を案内していただいた。また、竹富町自然環境課にご協力いただき、平成26年度に「竹富町墓地基本計画」を策定するにあたり、竹富町の各島で墓地の現状調査を行った結果を参考にさせていただいた。さらに、1993年にかけて黒島の調査に取り組んでおられた当時国立歴史民俗博物館の篠原徹氏よりご提供いただいた資料を活用し、黒島に関する記録資料の中から葬墓制の記録を抽出して紹介した。

後者の伝統行事については、映像等の記録を取る ことに重きをおいたので、今回の報告では割愛する。 この記録については、映像を現地黒島で活用してい ただけるよう、編集していきたいと思う。

調査は以下の日程で行った。

第1回 2014年2月25日~27日 古墓調査 第2回 2014年7月20日 豊年祭見学(映像記録) 第3回 2015年2月19日 旧正月綱引き見学 (映像記録)

1. 黒島について

黒島は石垣島の南西18.5kmの海上に位置する、周囲12.6km面積10.02kmの隆起サンゴ石灰岩からなる平らな島である。現在は、宮里、仲本、保里、東筋、伊古の5つの集落からなり、世帯数121戸、人口207人である[平成26年2月末現在]¹⁾。島の基幹産業は牛を中心とした牧畜で、島全体に牧場が広がっている。古くはアワやムギなどの雑穀栽培が主であったが、1940年代から甘蔗栽培と製糖、タマネギや煙草栽培が行われ、1960年代から肉牛飼育へと切り替わった²⁾。黒島は、元々隆起サンゴ石灰岩に覆われた地形であったが、牧畜の導入に伴い1972年(昭和47)から草地開発事業³⁾が始まり、機械で石が砕かれ牧草地に転換された。

黒島は、現在では人口200名余りの島であるが、かつては1500名を超える人口があり⁴⁾、そのため強制移住をさせられるなどの苦難な歴史もある。また、この島には按司の居城跡や番所跡、遠見台跡などの遺跡が数多く残っている。このほか、1975年(昭和50)に西表島から海底送水が実現し、1976年(昭和51)には電気が開通するなど、現在ではさまざまなインフラ整備が完了している。島の海岸付近には、風光明媚な自然が広がっている。

^{※ 〒 900-0006} 沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1 沖縄県立博物館・美術館

^{*} Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006, JAPAN

2. 古墓調査

総合調査では平成27年度の特別展(琉球弧の葬墓制ー風とサンゴの弔いー)の関係で、2014年2月の調査には黒島の古いタイプの墳墓について調査した。 黒島における墓は、現在ではコンクリートや琉球石灰岩、あるいは御影石造の新しい形式の墓に変わっている。しかし、現地の人びとの話では、少なくとも黒島が牧草地に変わる前までは、サンゴ礫を積み上げた石積みの方形墓があちこちに見られたという。本報告では、これらの墓を「石積墓」と言うことにする。

まず、黒島の古墓に関する文献としては、沖縄県教育委員会の『竹富町・与那国町の遺跡―詳細分布調査報告書―』[1980]に次のような記述があるので紹介する。

「牧場内のあちらこちらにフウメェへまたはユシ ヌバカと呼ばれる墳墓が見受けられる。フウメェヘ とは古い墓の意のようだ。フウメェへは百姓墓とし て大正年間までも使用されていたと伝える。以前は フウメェヘがいたる所に何百基もあったとのこと だ。牧場の草地改良事業でその殆どは消えたが、現 在でも無縁墓として百基近くは残っている。(中略) フウメェへは外形を珊瑚石灰岩で凸型に積み上げて つくってある。平面形は長方形で長い方の辺はだい たい7.5m~8.5mで短い辺は5.5m~6.5mである。 墓室はテーブル珊瑚を四方に立ててつくり、それが 墓室の蓋の支柱の役目も果たしている。墓室は上蓋 でそれもテーブル珊瑚をたいてい用いている。礫石 の底面から墓室の縁石までの高さは170cmくらい あり墓室面は約15cmほど低くなっている。1基の 墓にはたいてい複数の墓室が見られる。」5)

この報告書では、按司の居城跡とされるミントゥハネマ遺跡やイヌムル遺跡の近くにフウメェへが発見されているが遺跡との関係は不明とのことである。保里部落より約500m南西地点にあるミントゥハネマ遺跡のさらに南40mにあるフウメェへは、墓室が4つあり、その一室の上蓋のカサ石(テーブルサンゴ)が開いており、中には人骨やパナリ焼、壺屋焼、古伊万里、外来染付が確認されたという。また、宮里部落の北方約1500mにある按司の居城遺跡群の一つイヌムル遺跡では、草地改良工事のときに遺跡の北側の崖下の空洞を利用した古墓から頭骨が数体出た

といわれ、調査の結果、北側に3基、南側に4基の古墓が確認されたとある。また、一番規模の大きいウブスク按司居城跡の石垣の囲い内から、約5m四方のフウメェへが2基あり、その内の1基には人骨、パナリ焼片と口径約10cm、高さの7cmの香炉が確認できたという。さらに、仲本村の東方1200mにあるクスリチ遺跡に隣接する付近にもフウメェへが4基あったという⁶⁾。クスリチ遺跡の位置については、同報告書では仲本より南方に位置している⁷⁾が、運道武三氏が著した『黒島誌』では仲本の東方にあり⁸⁾、未確認のため図1では両方を併記した。

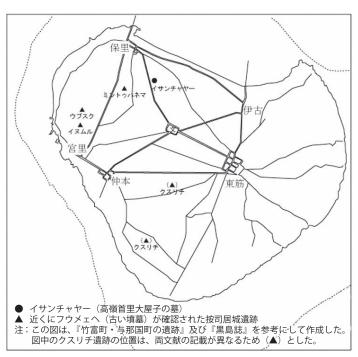


図1. 黒島の集落と墓に関連する遺跡(クスリチの位置は『竹富町・与那国町の遺跡』と『黒島誌』の両方を併記)

次に『黒島誌』から墓制についての記録を紹介する。 「墓 制 家族墓である。昔はヤーヌ墓(筆者: ヌーヤ墓の誤字か?)であった。二 重墓である。(中略)

○形 式 亀甲墓、破風型墓、昔は黒島には 1、 2点であったが、明治 40年~大正に かけて亀甲墓、破風型墓が各家々で 作られ、ヌーヤ (野屋) 墓が少なくなっ た。現在はみあたらない。(中略)

○ヌーヤ墓 小石を方形に高く積み上げ、平らな石 (海からとってくるカサ石)でふたを する。方墳となる。石のないときは カヤでふたをする。|⁹⁾ この資料では、黒島の古い墓は小石を方形に積み上げ、平らな石(海からとってくるカサ石)で蓋をした方形の墓であり、それを「ヌーヤ墓」と言うと示されている。また、黒島に亀甲墓や破風墓が造られるようになったのは、明治40年代以降であったことがわかる。

ヌーヤ墓とは、石を方形に積み上げた石積墓で、 石垣島や西表島などの八重山諸島に広く見られた形式の墓である(写真1及び2)。屋根の部分はテーブルサンゴの平たい石で蓋をしたり、カヤで覆う形のものもあった。このようなテーブルサンゴを積み上げた墓は奄美大島にもみられる(写真3)。



写真 1. 竹富島のヌーヤ墓 (1960年代)10)



写真2. 西表島祖納大竹祖納堂のチンマサの墓



写真3. 奄美大島宇検村佐念のモーヤ墓

つぎに、黒島には昭和47年に竹富町が史跡として 文化財指定している「イサンチャヤー」という古墓 がある。黒島初代の役人でこの島に初めて牛をもた らしたといわれる高嶺首里大屋子とその妻の墓2基 が並んでいる。イサンチャヤーは、福島駿介[1986]¹¹⁾ によるとミャーカ(ドルメン風の支石墓)として分 類された巨石墓である。ミャーカ墓は宮古島周辺で 多く見られ、16世紀頃の権力者の墓である。イサン チャヤーも10m以上の方形型の巨石墓であり、前述 の石積墓とは異なると思われる。また、もともとは ヌーヤ墓といわれるように屋根の部分を茅で覆って いたものと思われるが、現在は屋根が付いている。







写真4. イサンチャヤー(上:全景 中:石垣の内部 に石積墓 下:文化財指定の碑が建っている)

以上のことを踏まえて、調査した結果を報告する。2014年2月の調査では、東筋の野底幸生氏や仲本の宮城哲行氏等に聞き取りし、現存する古墓等を案内してもらった。ここではまず野底氏の案内で訪れた東筋と仲本集落の中間にある牧場内の古墓を紹介する。

野底氏が案内したのは、東筋集落より南西側に位置する放牧地の中であった。一帯は牛が自由に動き回る広大な牧草地である(図 2)。野底氏によると昔はこの一帯は全て畑で、ムギやアワ、大豆、サトウキビ等を作っていたそうであるが、今はその陰も見あたらない。

しばらく歩くと、草原の中に点々と石を積み上げた 小山が表れた。黒島では牧草地の中にこのような石山 があちこちにあるが、その大半は機械で砕石した石を 積み上げているだけのものだと説明を受けていた。し かし、野底氏が示した牧場の中に点々とある石山は、 まさに古い石積墓であった。

この日、筆者等は4つの古い石積墓を見て回ったが、詳しい測量はできなかったので、調査時のスケッ

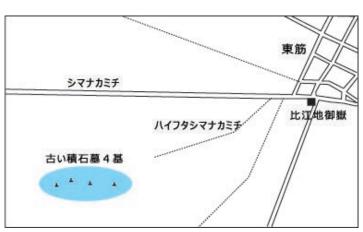


図2. 調査した場所の概略図(正確な位置は確認していないので大凡の位置)

チ等から簡単な概略図で紹介する。

(1) 古墓A

この墓は、周りを石灰岩礫で積んだ中にテーブルサンゴの平板を四方に立てて壁を作り、その上にさらにテーブルサンゴの巨石で蓋をしてあった。中をのぞくと方形の墓室になっており、そこに人骨を確認することができた。測量はしていない。









写真5及び図3. 古墓A (左上:外見 右上:簡易図面 左下:墓室の表面 右下:墓室内の人骨)

(2) 古墓B

古墓Aからさらに東に歩いたところにあった石積墓。石灰岩礫で囲い込んであったが、中の様子は不明。てっぺんに家の屋根を型取ったような石が3個あった。





写真6及び図4. 古墓B (上:外見 右:墓の上部簡略図)

(3) 古墓C

周辺を石灰岩の礫で積み上げ、内部にテーブルサンゴの平たい板石で方形に並べた石棺墓が確認できる。その中には、人骨等が発見された。外周部分の大きさは、縦188cm、横125cmで板石のある石棺墓の深さは80cmであった。この墓は、野底氏によると仲本集落の上原家の墓であるという。



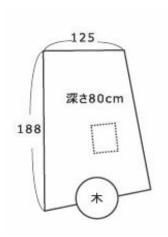






写真7及び図5. 古墓C (左上:外見 右上:簡易図面 左下:墓室の表面 右下:墓室内の人骨)

(4) 古墓D

この墓も周辺を石灰岩の礫で積み上げている。上部に登ると内側にテーブルサンゴの平たい石を支柱にした空洞のように見えたが、骨は見えない。深さも計測できなかった。周囲の大きさは縦138cm、横40cm。上部に屋根の一部として使われたのか、加工されたサンゴ礫が残っていた。

以上、古墓AからDまで概略を紹介した。これらの石積墓に共通する点は、1に、いずれもサンゴ石灰岩の石を積み上げて外壁を築いている、2に、内部にはテーブルサンゴを加工した板石を支柱にした石棺墓が数基ある、3に、石棺墓の蓋は巨大なテーブルサンゴの板石を使っていることである。古墓AとCからは、墓室の中に人骨を確認することができ、古墓BとDからは、サンゴ礫を加工して屋根の梁のような文様にした石がいくつか発見された。いずれの墓も長年使われていないとみえて、大木や、木根、蔦などの植物に覆われており、現状でははっきりした形は見えないが、少なくともフウメェへと呼ばれ

る石積墓の類であるといえる。ただし、野底氏はこのような墓を「シンマーラサー」と呼んでおり、この墓には同じ系統の祖先が葬られているとのことであった。

3. 現在の墓

竹富町が平成27年3月に発行した『竹富町墓地 基本計画』¹²⁾ によると、黒島の現在の墓数は112基 である。これらの墓の詳細について、住民説明会の 資料¹³⁾ に基づくと次のような傾向がみえる。

- ①墳墓の素材 コンクリート造77.8% 琉球石灰 岩21.1% 御影石等1.1%
- ②前庭の広さ 約2/3 22.2% 約1/2 63.4% 前庭なし 11.1% その他 3.3%
- ③管理状況(想定) 管理されている73.3% 管理されていない20.0% 不明6.7%
- ④立地状況 農業振興地域 100%

この結果から、墳墓の多くはコンクリートが普及 した後の比較的新しい墓で、しかも前庭が広く巨大





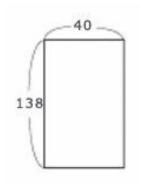






写真8及び図6. 古墓D(左上:外見 右上:上部の墓室の様子 左下:概略図 中下:記録した石 右下:加工痕 のある石)

な墓が多い。これらの墓の立地はすべて農業振興地域にあるため、竹富町では黒島の墓地の課題として、墓地の散在化を指摘している。実際に、島内を巡ると広大な牧場内に点々と墓が建っている風景をみることができる。

中でも、東筋の西側にある新城家の墓(写真9左上)は、敷地面積200坪以上の巨大な墓である。この墓について新城輝文氏にお話を伺った。新城家は代々ミルク神を司る由緒ある家で、この墓は25年程前に新城氏の祖父が造ったもの。袖墓がある亀甲型の墓で、内部には壺を置くための棚があり、後部にコンクリート製らしき合葬用の大きな箱があるという。新城家の墓は元々違う場所にあったが、祖父は自分の土地の中にかなりの資金を投じてこの墓を建てた。墓は家の守ってくれる存在になっているそうである。

このように、黒島では墓所という一定の場所はなく、牧場内に自由に墓を建てるという特徴があるが、 これはヌーヤ墓のように古くから平地に石を積んで 墓を造ることが慣習としてあったからではなかろうか。

4. 黒島の葬制

黒島における葬法は、昔は遺体を風葬し、数年後に水で洗って酒で清める「洗骨」を行い大きい壺に納めていたが、現在ではほとんどが石垣島の病院で亡くなり、火葬されて島に帰ってくるという。そこで、風葬や洗骨がいつ頃まで行われていたかを中心に文献や聞き取り調査の結果を報告する。

まず、『黒島誌』[1988:運道]の葬送の項¹⁴⁾ には、 火葬以前の葬法についての記述がある。

それによると、臨終を迎えた死者は、逆水をとり 正装させて、生き方(マリプウ)、クサテヌ方の神 に礼拝させたという。葬式を出す前に入棺の式があ り、ここで家族、親類との別れの杯をかわし、後生 へのお土産(お茶、煙草、手拭、針、糸、打紙等) を預ける。入棺は、長男が頭をもち、二、三男は足(下









写真9. 左から放牧地の中に点在する墓(左上:新城家の墓 右下:岩盤を利用して作られた亀甲墓)

体)を持って棺に入れ、寝かせて屈膝させる。葬式は、 ①みち道(4本)、②提灯(2つ)、③供花、④名旗、 ⑤位牌持ち、親類、男の会葬者の順、⑥龕、⑦親類 の女、会葬者の女、⑧てんがい持ち、⑨念仏鐘打ち の順に墓に向かう。7歳以下の子供は、墓まで家族 がおぶっていき、墓場で箱に入れて墓所の隅の穴を 掘って埋葬する。

納骨後、3日、7日、14日、21日、28日、35日、42日、49日、100日、1年、3年、7年、13年、25年、33年の法事がある。また、洗骨は、死後3年、5年、7年、9年目に行う。死人のあるときは、葬式の朝洗骨をしてから葬式を出す。洗骨は旧暦7月や11月に多いとある。

この資料では、いつ頃までこのような葬法が行われたかは定かでないが、葬送儀礼の流れを見ることができる。

次に、『うみがめ~る』第56号 [2009] の記事(p67) には次のような記録が見える。

「島で葬式があると、朝から集落じゅう総出で準備をした。棺おけを作る者、炊き出しをする者、折り紙で花を作る者、遺体を運ぶ「龕」を準備する者、時にはお墓も同時に作ることもあり、石割作業などもあった。子どもたちも集められ、手伝ったり、食事等を与えられた。」¹⁵⁾

これは、昭和43年生れの又吉敬氏のエピソード紹介の一節で、又吉氏の幼少期にドルを使っていた等の記述から復帰直前の話であったことがわかる。このように、黒島では少なくとも復帰前までは集落総出で葬式を出し、遺体を墓へ運び風葬していたと考えられる。

次に、2014年2月と2015年2月の調査時に聞いた話をまとめることにする。話者は、東筋集落の野底幸生氏と新城輝文氏、及び仲本集落の宮喜キヨ氏である。

野底氏は、13年前(調査当時)に島で突然亡くなられた家族を風葬し、7年目にそれを取り出して火葬した経験を話してくれた。風葬した遺体を7年後に取り出したときは、トタンを敷いて薪を燃やし、棺桶ごと燃やしたそうである。死者は二番座に西枕で寝かせて、公民館にあった白黒の幕を張って死者を囲んだ。火葬する以前は、骨を水で洗って酒で拭いていき、足から壺に納めていた。また、龕はあっ

たが使っていないとのこと。

現在40代前半の新城氏からは、30年以上前と最近の黒島の葬法についての話を伺った。まず、30年以上前に新城氏の祖母が亡くなられた時には、遺体を古い墓に葬り、何年か後に出して薪の上に乗せて焼いたそうである。その骨を洗って(たぶん甕に)納めたのを見たとのこと。現在は、石垣の病院で亡くなると、火葬して石垣の葬儀セレモニー会館で告別式をし、島に帰って家でもう一度告別式を行うことが多い。島に墓がある人や高齢者は2度葬式をするが、島に墓がない場合などは石垣で葬儀して石垣に墓を建てる人も少なくないそうである。

宮喜氏は、昭和3年生まれである。ご主人は石垣で亡くなり火葬したとのこと。しかし、昔は木の箱を作って遺体を入れ、それを墓に納めていたという。10年前に10数年置いた遺体を墓から出して焼いた。それ以前は洗って甕に入れたそうである。葬式の時には仲盛の龕を使い、喪家では黒い布を張って死者を囲んだ。

宮喜氏は、墓についても話してくれた。それによると、墓は上等な場所を選び石で囲んで作ったが、現在は新しい墓に作り替えた。そのとき、宮喜家の先祖の遺骨を甕に入れて移し替えたとのこと。骨甕は、茶色で石垣から買ってきたそうである。死者には一番上等の着物を着せた。また、念仏者はいなかったという。

以上の話から、黒島では少なくとも復帰前までは 集落で共同して葬儀を行い、風葬していたと思われ る。また、風葬後の洗骨は、30年ほど前から火葬 していたこともわかる。すなわち、黒島では風葬後 に骨を洗う、いわゆる洗骨から、風葬後に骨を焼く 焼骨への葬法の転換があり、その習慣が10年ほど 前まであったといえる。また、現在では石垣で死亡 する例がほとんどで、そのため火葬後、石垣と黒島 の両方で葬儀を行うということが慣例化している。 このような葬送儀礼の変化については、今後さらに 聞き取り調査を進め、龕や葬式幕等の葬具類の調査 や墓地へのダビミチのルート調査等も含めて明らか にしていきたい。

おわりに

今回の報告は、平成27年度博物館特別展「琉球 弧の葬墓制―風とサンゴの弔い―」の中で、奄美か ら八重山諸島にかけての葬墓制に関する調査も兼ね て行った。その結果、黒島の墓について、その形態 や立地場所に興味深い特色が見いだされたので、特 別展の中でも一部紹介させていただいた。

黒島の墓は、古くは石積墓が主流であったと思わ れる。石積墓以外にも岩盤を利用した亀甲墓等も一 部にあるが、元々平たい台地上の地形をしている黒 島では、岩盤を掘り込むより石を積んだ方が造りや すかったのではなかろうか。これまでの調査で、黒 島以外の周辺離島においても石積墓の存在は確認さ れている。とくに西表島古見の後良橋の北西約300 mの山林や東のカサ崎の丘陵地には、こうした石積 墓が100基以上あったといわれる160。石積墓は、俗 にヌーヤ (野屋) 墓と称しているが、黒島では「フ ウメェヘ」と呼んでいる。また、野底氏の言うよう に「シンマーラサー」との呼称もあることから、石 積墓の形態や名称についてはひとくくりにすること はまだ難しい。しかし、今回の調査で、実際に牧場 内に現存する古い石積墓を確認できたことで、その 形状がいくらかは明らかできたと思う。残念ながら、 竹富島のヌーヤ (野屋) 墓はすでに取り壊されてお り、また、西表島古見の石積墓も開発青年隊訓練所 建設のため大部分が破壊された。黒島においても草 地造成のため石灰岩台地を掘削されて古い石積墓の 多くが失われ、最近では新しい墓への改築も顕著で ある。このような状況にあるため石積墓のさらに詳 しい調査を行うことは近々の課題であると感じた。

葬制についても風葬から火葬へと転換し葬儀の方法も大きく変わった昨今、今のうちに村人共同で葬式を出していた時代の話も集めなければならない。葬送儀礼についての聞き取り調査の難しさを強く感じたが、話者の皆様に随分と助けていただき貴重なお話を聞くことができた。残念ながら、黒島単独でいえば葬墓制調査はけして十分とは言えないまま終わってしまい、多くの課題を残している。今後も引き続き調査を進め、記録を残して行きたいと思う。

謝辞

今回の調査では、東筋集落の野底幸生氏、新城輝文氏、仲本集落の宮喜キヨ氏には、葬墓制に関する貴重なお話を伺い、現地調査に同行していただくなど、大変お世話になりました。また、日本ウミガメ協議会附属黒島研究所の若月元樹氏と黒島ビジターセンターの宮良哲行氏には、現地での案内や話者の紹介等々に多大なるご協力をいただき、琵琶湖博物館館長の篠原徹氏には黒島に関する貴重な資料を多数ご提供いただきました。さらに、竹富町役場自然環境課(当時)の西里幸晴氏にも資料をご提供いただきました。ここに記して心より感謝申し上げます。

参考・引用文献

- ¹⁾ 南山舎, 2015, 『2015年やえやまなび (navi)』 p4, p88.
- ²⁾福本美知子,1986,「八重山、黒島における生業の変遷と儀礼―その一 アワ作りの過程と儀礼について―」,人間博物館リトルワールド,p56.
- ³⁾関東黒島郷友会 編集・発行,1988,『関東黒島 郷友会 創立二十五周年記念誌 黒島』,p35.
- ⁴⁾運道武三, 1988, 『黒島誌』, p50.
- ⁵⁾沖縄県教育委員会,1980,『竹富町・与那国町の 遺跡一詳細分布調査報告書―』,沖縄県文化財調 査報告書,第29集,p70.
- ⁶⁾同上 p71-77.
- ⁷⁾同上 p81.
- 8) 運道武三, 1988, 『黒島誌』, p30.
- ⁹⁾同上 p146- p147.
- 10)写真提供:名嘉真官勝氏
- 11)福島駿介,1986,「沖縄における伝統的建築技術 の伝播と定着に関する研究(2)」,『(財法)新住 宅普及会住宅建築研究所報』,p4.
- ¹²⁾竹富町自然環境課, 2014, 『竹富町墓地基本計画』, 竹富町.
- ¹³⁾竹富町自然環境課,2014,「竹富町墓地基本計画 策定に伴う地域説明会 黒島」.
- 14) 運道武三, 1988, 『黒島誌』, p143-144.
- ¹⁵⁾黒島研究所, 2009, 『うみがめ~る』, 黒島研究 所だより, 第56号.

¹⁶⁾沖縄県教育委員会,1980,『竹富町・与那国町の 遺跡一詳細分布調査報告書―』,沖縄県文化財調 査報告書,第29集,p26.